「共に生きる」

八戸工業大学第二高等学校
普通科　１年　山端　みさき

今、世界ではエネルギーの在り方を改めることが求められている。技術や文明発展の代償に、環境は混乱の渦中にのみ込まれてしまった。このままでは、危惧されている地球温暖化の他にも、様々な弊害が生じてしまう。特に日本は深刻だろう。日本は他国と比べて化石燃料依存度が高い現状にある。依存度が高いけれど、資源は採れない。そのため、今、ロシアのウクライナ侵攻による燃料高に対応するため、料金が値上げされている。企業や家庭にとってのダメージも大きい。が、逆にこれをチャンスと捉えることもできる。これは、依存から脱する良い契機なのではないか。それには、日本のおのおのの地域の強みを生かすべきだと思う。

風が強く、広大な面積を確保しやすいという地理的に好条件であるため、青森県は風力発電が盛んだ。県内の２０２１年度の発電実績は１２億3,864万kW時。２年連続で全国１位となっている。大規模発電所の建設が相次いでおり、今後もさらに増加する見込みらしい。風力発電における二酸化炭素排出量は火力発電に比べかなり少ないため、今の地球と青森にとって最適かと思われる。しかし、これには課題が二つある。

一つ目は、やはり自然エネルギーであるため、発電・供給量が安定しないところだ。いくら青森県が風に恵まれているといっても、自然を相手にする限り、いつ何が起こるか計り知れない。

二つ目は、県民・地元からの反対の声にある。前述したとおり、風力発電には広大な面積を確保しなければならない。すると、環境や景観へどうしても影響がでてきてしまう。実際の声として、事業想定区域の八甲田山系で活動する自然ガイドらが市民団体を結成。「風車が景観を損なう」として事業者側と意見交換を重ね、署名を提出している。他の場所の事業でも「自然や歴史的価値を損なう」と計画撤回を求める声を上げている。これに対して三村申吾青森県知事もコメントしている。

「再生可能エネルギーなら何をやってもいいのか。大切な水を蓄える森林を無秩序に開発していいわけがない」。

私には、ひどくこの言葉が響いた。私的な話になってしまうが、私の住んでいる地域は森林に囲まれている場所だった。しかし、ここ数年で一気に伐採が進み、太陽光パネルが設置された。それまであった緑はなく、ただ機械が並べられているその光景を見たとき、何と言葉で表してよいか分からない、無力感

でいっぱいだった。「風力発電や太陽光発電は、地球に優しい発電だから、増やすべきだ」という考えを、皆が一から見直すべきだと思う。確かに取り入れていくべきだとは思うが、その背景で何が起こっているのかを考えていきたい。まず、光合成を行い、二酸化炭素の削減を手助けしてくれる緑をなくすことは、本末転倒ではないのか。生きている森を、殺してはいけない。

　その地域の強みを生かしたエネルギーづくり。それを様々な角度から検討し、折り合いをつけていくことが大切なのだろう。生きているものを殺さず、生かす社会を。

◎出典・参考
＊「デーリー東北」２０２２年７月２６日の記事より抜粋

＊「デーリー東北」２０２２年８月４日の記事より抜粋

＊ 青森県『青森県エネルギー産業振興戦略』(平成２８年３月発行)第３章
青森県のエネルギー産業の状況より一部抜粋
https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/energy/enerugi/files/strategy201603_3.pdf